

## デイヴィド・リカードゥ

種 瀨 茂

### 一

一九一〇年は、リカードゥ(David Ricardo, 1772—1823)の最初の著書『地金の高價格』<sup>(1)</sup>が出版されてからちょうど百年にあたった。著名なリカードゥ研究者、J・H・ホランダー(J. H. Hollander, 1871—1940)は、これを記念して、リカードゥのメンタル・ヒストリーを探索し、リカードゥ研究に一分野をひらいた。<sup>(2)</sup>

(1) D. Ricardo; The high price of bullion, a proof of the depreciation of bank notes. London, 1810.

(2) J. H. Hollander; David Ricardo, A centenary estimate. Johns Hopkins University studies in historical and political science. Series xxviii, No. 4. Baltimore, 1910. 山下英夫譯、一九三一年。

ホランダーは自らの研究のねらいを明らかにするに當

って、當時におけるリカードゥ研究の状況について、次のようにのべている。「經濟上の諸原則の性質と妥當性に關する近代の論争は、大部分リカードゥの理論的貢獻をめぐって行われた。一方においては、歴史學派と「主觀」派經濟學者の一團とは、ジェヴォンズの好意のない判決を再び強く斷定することにおいて、共通の緣故が發生した。他方において、他の方面から、リカードゥの諸理論の本質的正確さを主張する頑強な論争が行われ、それと共に根本的な再評價の要求が生じた」と。<sup>(3)</sup>ホランダーのいう研究とは主として價值論を中心とするものではあるが、それにしても、價值論が經濟學體系の基本的問題としてあるかぎり、一九世紀の經濟理論の發展は、リカードゥ價值論への對決において自己を確立し、<sup>(4)</sup>その特徴をあらわしているといふことができる。すなわち、限

界效用學派によるリカードゥの價值論の批判、ミル (J. S. Mill, 1806—1875) をへつ、マーシャル (A. Marshall, 1842—1924) において體系化されるケンブリッジ經濟學の折衷的價值論からのリカードゥ評價、これらに對立してリカードゥの投下勞働價值説を批判的に展開したマルクス經濟學の價值論、ホランダーの指摘しているのは、これらの價值論であった。

(3) J. H. Hollander: *op. cit.*, p. 63. 山下譯、七九ページ。ちつらに同書第三部において、リカードゥ經濟學の影響が論じられてゐる。ibid. p. 126 註、譯一六九ページ以下。

(4) ホランダーは同書第二部においてリカードゥの經濟學が形成される過程を論ずるに當り、主として價值論の發展を中心としてゐる。それはホランダーの前著「The development of Ricardo's theory of value. in "the Quarterly Journal of Economics. August 1940."」に多少の補足を加えたものである。もちろんリカードゥの研究分野がそれに限られてゐるのではない。

リカードゥ經濟學の評註として著名なものとして、ディールおよびサン・クレアの著書がある。Karl Diehl, *Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung.* 2 neu verf. Aufl. Leipzig, 1905. Oswald St. Clair, *A key to Ricardo.* London, 1957.

リカードゥに關する文献目録として最近のものに、關西大學經濟學會資料室編「リカードゥ文献目録」(關西大學經濟論集) 第八卷第六號、一九五九年三月、一一三—一八〇(ページ)がある。

ホランダーはさらにつづけて、これら學說上の論争は、「熱心さの餘り少なからず原文に即しての研究から離れてしまった」と批判し、當時一八八七年以來公表されたリカードゥのマルサス (T. R. Malthus, 1766—1834) マカロック (J. R. MacCulloch, 1789—1864) トラヴァ (H. Trower, 1777—1833) あての手紙その他の資料をもとにし、「經濟學者としてのリカードゥのメンタル・ヒストリーの徑路をおい、又相當の正確さを以てかれの最も特色ある學說の進化を究めること」が可能になったと述べてゐる。<sup>(5)</sup>

(5) Hollander: *op. cit.*, p. 64. 邦譯八〇—八一ページ。

ホランダーは、そこで、當時の社會的現實の中でのリカードゥの生涯をたどり、そこからかれの經濟學體系の特色を描き出し、後代への影響を確定しようとしたのである。ホランダーの強調するのは第一に、リカードゥ經濟學が現實の社會的問題に觸發され、それに對するきわ

だつて實踐的な課題解決のために形成された科學的體系である、という點である。<sup>(6)</sup>この點の指摘は、リカードゥ經濟學の抽象性が現實への對應を失つた論理であるという批判に對し、十分強調されるべきであり、ホランダーの研究のすぐれた點である。第二に、リカードゥ價值論に關してのホランダーの把握は、決して十分とはいえない。すなはちホランダーは、リカードゥが當初スミス(A. Smith, 1723-1790)にならい投下勞働價值説をいっていたのであるが、研究の進行とともに、それを修正し、とくに『原理』第二・第三版においての價值尺度論の變化と、それをめぐる論争の経過とともに、その修正を強めていった、というのである。そして、もしリカードゥにしてなお數年の餘命をもたしめたならば、おそらく、マシーナルのいだいた價值論(生産費説)に向つて着々と前進したであろう、と推定する。<sup>(7)</sup>このホランダーの見解は、いわゆる投下勞働説がますます修正されてゆく過程としてリカードゥの研究の發展とし、遂には、生産費説に到達するべきものとして把握するのである。

(6) Hollander; op. cit., pp. 57-58, 邦譯七一七二ページ。ibid., pp. 116 ff, 邦譯一五五ページ以下。ibid., pp.

129 ff, 邦譯一七四ページ以下。

(7) Hollander; ibid., p. 105, 109 and p. 114, 邦譯一三八、一四四、一五〇ページ。

リカードゥ價值論に關する右の見解は、現状におけるリカードゥ評價として一般的である、といえよう。始めからリカードゥの見解を拒否し否定的に評價したり、あるいは、リカードゥがその原理の當初から生産費説をもつていた、と評價する見解に對し、ホランダーはその理論形成の過程をたどつて、リカードゥ價值論の特質を把握しようとする點ですぐれている。しかし、はたして、それはリカードゥの內的眞實を正しく把握しているであろうか。

ところで本年は、右のホランダーの研究からすでに五〇年が経過し、私たちはリカードゥの『地金の高價格』出版一五〇年を迎えた。私たちはこの年を新しい『リカードゥ全集』<sup>(8)</sup>をもつて記念できるのである。

(8) The Works and correspondence of David Ricardo, ed. by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, 10 vols. Cambridge, 1951-1955.

この全集はスラフ教授およびその協力者たちの二〇餘年の努力により、新しい資料を加え、現在における

最も包括的なそして嚴密なリカードゥ全集となった。<sup>(9)</sup> さらにまた各巻に付せられた編集者の序文はリカードゥの著作や手紙・講演等の成立事情を詳細に描き出すことにより、リカードゥ研究としてすぐれた最新の成果となっている。

(9) 第一巻に付せられた General Preface および第一〇巻の傳記雜録を参照。とくに失われたとされていたマルサスのリカードゥあての手紙、ミルあてのリカードゥの手紙、『ペンタム評註』『絶対價值と交換價值』等の遺稿、これらはたんにリカードゥ研究のみならず、當時の思想・理論の研究に大きな新資料を提供している。

私たちは今、このすぐれた新『全集』を土臺にして従来のリカードゥ研究を、さらに展開するべき地點に立っているのである。

ホランダールの研究はもちろんその上に立って批判・検討されねばならないであろう。リカードゥの生涯については、従来知られるところ少く、ホランダールの研究が最も高く評價される<sup>(10)</sup>ところであるけれども、それに關して新全集の第一〇巻は Biographical Miscellany と題され多くの新しい資料を加え、ホランダールの研究を補足し訂正している。

(10) ホランダールの前掲書第一部は、リカードゥの時代的背景、家系についてのべられたあと、リカードゥの生涯を四期に分け、青少年時代(一七七二—一九九年)、金融業者の時代(一七九九—一八〇九年)、經濟學者としての時代(一八〇九年—一八一九年)、代議士としての時代(一八一九—一八二三年)として、それぞれの主要な活動をjしてゐる。

以下ホランダールおよび『全集』の研究によりつつ、その經濟學形成過程における重要な二・三の點をたどつてみよう。

リカードゥは一七七二年ユダヤ人金融業者の子として生れ、青年時代をユダヤ人の慣習の中に送った。オランダにおいて教育をうけ一四歳にして父の業務を手傳い、早くからその仕事に熟達していた。一七九三年クエイカー(Quaker)教徒の娘プリシラ・アン・ウイルキンソン(Priscilla Ann Wilkinson, 1768—1894)と結婚し、父のもとをはなれて、獨立の金融業者として立った。この結婚によるクエイカーへの接近は、自然科学に對するかれの興味とともに、リカードゥの思想形成に重要な要素となった。

かれが金融業者として出發した年は、對フランス戦争

開始の年であり、こうしてかれの五一年餘の生涯の時代はイギリスにおける産業革命とフランス革命のもとにおける激動の時代であった。まさにこの時代的背景が、かれの経済學形成に大きな影響を與えるのである。

リカードゥはこの對フランス戰爭の中で、急速にその業務を擴充し、株式仲買人として公債引受人 (Loan Contractor) として、一八〇九年にはすでに金融界における有力な人物となっていた。

リカードゥが經濟學に接した最初がいつであったかは正確には分らない。一七九七年、溫泉地バス (Bath) で、偶然、スミスの『諸國民の富』を手にした、と傳えられている。しかしまた、後に友人トラワアに對し、スミスの著作や「エディンバラ・レビュー」(Edinburgh Review) の初期の論文をともし、讚美しつつ讀み、毎日のように仕事の暇には、それについて論じあった、と同想をかたっている (一八一八年一月二六日づけの手紙)。

エディンバラ・レビュー誌は、スミスの影響をうけついで急進的思想家の機關誌として、一八〇二年刊行され、次第にウィング黨の立場を支持していった。リカードゥが當初から、これらに接し、また後に——一八〇七

年といわれている——父ミルとの交友をはじめるのは、かれのブルジョア・ラディカルズ (Bourgeois Radicals) としての思想を形成する重要な要因であった。

當時イギリスの通貨制度は一七九七年のイングランド銀行制限法のもとにあり、不換銀行券の制度であり、戰時經濟の問題とともに、いわゆる「地金論争」(Bullion Controversy) の渦中にあつた。

リカードゥはまず一八〇九年、モーニング・クロニクル紙へ三つの手紙を寄稿し、ついで、一八一〇年初頭、前述の最初の著書『地金の高價格』を刊行し、こうして當時の通貨問題に關連し、「地金論争」に参加するのである。ミル (James Mill, 1773—1836) マルサス (T. R. Malthus, 1766—1834) 等經濟學者や政治家・思想家との交遊が進められる。かれの經濟學研究は、當時のイギリス社會の大問題、すなわち、一七九七年銀行制限法の後の、不換銀行券制度下での「地金論争」、一八一三年以來の「穀物法論争」等、を通じて、その友人との論争の過程で形式されてゆくのである。

リカードゥは一八一四年に、グロスターシャー (Gloucestershire) のガトコム・パーク (Gatcomb Park) に美

しい地所を入手し、ロンドンの大邸宅は春から夏にかけての町屋敷として使用された。こうして金融業からは次第に退くとともに、経済學研究の興味を深めてゆく。一八一九年には代議士となり、經濟問題のみではなく、政治・思想問題について活發に働いた。その立場はトリー、ウィッグ兩黨から獨立し、急進的ブルジョアの立場であった。

一八二三年九月、ガトコムにおいて耳をやみ、數日の後、九月一二日に死去した。その五一餘歳での死はきわめて突然であった。

## 二

ところで、リカードの名著『經濟學および課税の原理』(初版一八一七年、第二版一八一九年、第三版一八二一年)は、直接には「地金論争」におうものではなく、一八一三年から一五年にかけての「穀物法論争」に、その出發點がある、とされてきた。<sup>(2)</sup>

- (1) Works. I. 小泉信三譯、岩波文庫版
- (2) Hollander, op. cit., p. 73. 邦譯九二ページ。

この論争は激しい政治的闘争として議會内外をいろいろ

つたのであるが、それは穀物法によって利益をうる地主階級と、それによる食糧や賃銀の騰貴のために不利となる資本家および労働者階級との對立を示している。それは經濟學上において、地代・利潤・賃賃の内的關係として把えられる。當時の經濟學の基礎的體系であったスミスの見解が分配問題として検討されるにいたった。

リカードは『原理』初版の序文で經濟學の主要問題を、土地生産物の三階級間への分配法則を決定すること、にあるとし、テュルゴ、ステュアート (Sir J. Steuart, 1744—1839)、『スミス』、ヤー (J. B. Say, 1767—1832)、『シモンディ』 (J. C. L. Simonde Sismondi, 1773—1842) によって、經濟學は大いに進歩したが、なお地代、利潤、賃賃の自然的行程 (natural course) については不十分である、と指摘し、その研究を自らの目標としている。<sup>(3)</sup>

(3) Works. I. p. 5. 邦譯、九二ページ。  
それゆえ、この分配論についてのリカードの見解がいかにして形成されてゆくか、を探索することは、同時にリカードの經濟學の主要な特質を把握することになる。

前述のように、それは「穀物法論争」に端を發すると

一般に理解されてきたが、新『全集』における訂正により、それより前すでに「地金論争」の延長として展開されたものとみられるにいたった。<sup>(4)</sup>

(4) 従来のマルサスあてのリカードゥの手紙 [Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810—1823, Ed. by James Bonar, London, 1887. 邦譯、中野正譯、岩波文庫版、は一八一三年の手紙五通を誤って一八一〇年としている。

このため、利潤論の起源に關して混亂が生じていた。たとえば Hollander; op. cit., pp. 75—6. 邦譯九六一—九七ページを参照。新しく『全集』にもとづく研究としては、G. S. L. Tucker; 'The origin of Ricardo's theory of profits, in "Economica, Nov. 1954"」および R. L. Meek; 'Studies in the labour theory of value, London, 1956. p. 89.

われわれが新全集に接して學びえた限り、リカードゥが資本蓄積と利潤率について自らの見解を表明したのは、一八一三年八月一〇日および一三日のマルサスあての手紙においてであつた。<sup>(5)</sup>

(5) Works, VI. pp. 92—95. 中野譯上卷二一—二四ページ。

當時のマルサスの手紙が缺けているため、その見解は

直接知りえないのであるが、推定によれば、一七九三年のフランス戦争開始以來、外國貿易の擴張にともない、取引の増加がおこり、資本はその需要に比例して乏しかったがため、利潤率の増大があらわれた、という主張である。これはすでにマルサスが、當初からいだいていた「需要供給に關する大原則」<sup>(6)</sup>に則しての解明であり、後のマルサスのリカードゥ批判をしらしめる。

(6) Works, III. pp. 103—104.

これに對しリカードゥは、當時利潤率の高かつたことは疑いない、と事實について同意を示し、その理由について次のように答えているのである。すなわち、その高利潤は「フランス革命が食糧の生産の増加のために著しく好都合であつたという理由から、國の内外の農業の疑う餘地なき改良を伴つて居つたものでありますから、完全に私の理論と調和させることができます。私の結論を申せば、當時資本の急速なる増加をみたが、それは食糧の生産における新たな利便のために、利子率の低下となつて表面に現われるのを妨げられた、ということになります」と。ここには農業における改良が、資本の増加にともなつて生じる利潤率の低下を阻止するというこ

とが述べられている。すなわち、マルサスの見解が、資本についての需給から利潤率の高低を把えるのに對立して、農業における食糧生産との關連において利潤率を規定しようとするのである。

この關連の理論化が、次の「穀物法論争」を契機として進められるのであるが、リカードゥは、右のマルサスとの對立點を、翌一八一四年三月八日のトラワアあての手紙で明確にしている。<sup>(8)</sup>

(7) Works. VI, pp. 103 ff. 中野譯、三四—五ページ。

「一國において資本が増大する場合、それと同じ割合で、資本を充用する手段がすでに存在し、もしくは増大するならば、利率および利潤率は下りません。……私の主張する點は、新資本を充用する場面はいずれの國においても、耕作法が改善されるとか、——あるいは外國からの食物の輸入に新しい便宜が提供されるかしないかぎり、資本自身と同じ割合で、もしくはより大きな割合で増加するものではないということです。要するに、他の一さいの産業の利潤を調節するものは借地農家の利潤であり、——借地農家の利潤は、土地に使用される資本の増大と同時に耕作法の改善が行われるのでないか

ぎり、この資本が増大するごとに減退するのであるから、他の一さいの産業の利潤も減少せねばならず、したがって利率も低下せねばならない、という點です。」

ここでは農業における利潤が他の産業の利潤を規定する、と明白にのべている。そしてその理由を次のようにのべる。

「私は申します。同額の、もしくは増加せる資本が用いられる場合、産業の利潤を永續的に増大しうるものは、食糧を獲得する真に低廉な方法以外に何も無い」と。

以上の手紙に示されたリカードゥの蓄積論は、一八一四年を通じての「穀物法論争」を通じて明確化される。かれの見解は次のごとくであった。すなわち、穀物輸入制限は穀價の騰貴を意味し、それは賃銀を騰貴せしめ、そして高い賃銀は利潤を低落させる、というのである。この高い賃銀が利潤を低下させるといふ見解は、「かれの時代の商業階級の間ゆきわたっていた單純なる信念」<sup>(8)</sup>であった。リカードゥは、その見解を資本蓄積過程の理論的分析として説明するにいたるのであるが、リカードゥがその出發において、この立場に立っていること



は注目にあたいする點である。

(8) E. Cannan; History of theories of production and distribution. 3rd ed. London, 1917. p. 164. Hollander; op. cit., p. 75. 邦譯九六ページ、參照。

これに對してマルサスは次の二點について批判し、自己の蓄積論を示す。批判の第一は、農業における利潤率が他の産業の利潤率を規定するとは必ずしもいえない、という點であり、それはまた賃銀はかならずしも穀物によつてのみ規定されえない、という批判ともなる。何故、リカードゥが農業生産を主軸としているかは、資本をほとんど勞賃部分に限定し、農業においては、その投下資本と生産物が同一性質であり、この比率が利潤率を直接表示することができるからである。すなわち後に示される「穀物比率」(corn-ratio) による表示であつて、賃銀と利潤の對抗は、價值・價格の問題を考慮せずに解明しよう。リカードゥは、それを賃銀と利潤との「對角線的對立」(一八一四年一月三日、マルサスあての手紙)といっている。ところで農業以外の利潤率が必ずしもそれによつて規定されず、生産物價格がスミスのいうごとく、賃銀の騰貴とともに上昇するとすれば、必ずしも利

潤率の低下をひきおこさないであろう、というのが、マルサスの批判の第一點であつた。

(9) Works. I. Editor's Introduction. p. xxxi.

次に第二にマルサスは、前述のように、資本の需給による利潤率の規定という立場から、穀物輸入制限による地代收入の維持が、資本の供給に對應し、かならずしも生産を阻害せず、利潤率の低下ともならない、と批判する。この論點は、單に穀物法問題からさらに展開して、資本蓄積過程における需給問題に焦點がしぼられ、リカードゥは、資本の増加、供給の増加は、短期間においてはマルサスのいうごとく有効需要を超過することはあつても、それは價格をひき上げ生産を刺戟し、結局、需給の不均衡は資本の運動によつて解決せられるのであつて、それによつて永續的に利潤率が影響をうけることはない、と答えている。この論争は「ミル氏の理論」あるいはセーの販路法則をリカードゥが援用しつつ、マルサスの需給説にもとづく利潤論に答えている點で、重要な意味をもっている。<sup>(10)</sup>

(10) ケインズによつてセー法則をリカードゥ經濟學の「基礎的前提」として把握するチェクランドと、これに對する

ミークとの論争を参照。S. G. Checkland; The propagation of Ricardian economics in England, in "Economica. New Series Vol. 16. No. 65. Feb. 1949" R. L. Meek; The decline of Ricardian economics in England, in "Economica. N. S. Vol. 17. No. 65. Feb. 1950." 邦譯『イギリス古典學派』吉田洋一譯、一九五六年、所收。なお Marg Blaug; Ricardian Economics; a historical study. New Haven, 1959. pp. 2, 93.

ミーク教授は、リカードの功績はセー法則に依據したことにあるのではなく、資本主義經濟社會の內的構造を把握した點にある、として正しくチェックランド教授を批判している。しかし、ミーク教授は、セー法則がリカードにとって自己の見解を示すためのマルサスの需給論批判のための便利な武器であった、と理解される。だがセー法則は、むしろリカードにとっては資本の運動過程として把握されている點が大切なのであり、單に「生産が消費を規制する」という需給一致論ではない。この點については、とくにリカードの恐慌論把握に關連して重要な論點となる。

この論争を契機としていかにして高賃銀は利潤を低下せしめるのか、リカードはこれを資本蓄積過程一般の法則として示す。その環は、マルサスから直接に學んだ、差額地代論である。すなわち、資本の蓄積にともなう人口の増大、食糧需要の増大は、より劣惡の土地を耕作に

ひき入れ、あるいはより劣惡な資本の投下をもたらし、收穫遞減の法則の作用による食糧(穀物)の高價、かくして勞賃の騰貴と利潤の低落がもたらされるのである。

リカードはこの地代論を環とした、資本蓄積にともなう利潤の低下を、穀物量の比率が表示する。これが、『低い穀物價格が資本の利潤におよぼす影響』に關する一論(一八一五年)におけるリカードの見解であった。<sup>(11)</sup>

(11) Works. IV.

『一論』におけるリカードの地代論は、前述のようになお穀物比率をもつて例示されているのであるが、しかしマルサスを批判しつつ、地代はむしろ利潤からの控除である、とし、かくて「土地の上で使用される資本の最後の部分はただ蓄財の普通の利潤をたらすばかりであつて、地代を與えるものではない」というマルサス自らの言明に賛成し、そして、「そうだとすると、穀物の價格は、他のすべてのものと同じように、生産費によって調節されることになる、」とのべる。<sup>(12)</sup>

(12) Works. VI. p. 177. 邦譯「上卷」一六六ページ。

さらに、この生産費すなわち、「生産物の價格」が「貨物の交換價值」として把えられ、その大いさは生産に要

する労働の多少によるものという規定にまで進んでい  
る。<sup>(13)</sup>

(13) Works. IV, p. 19. 吉田譯、二八ページ。大川譯、二〇ページ。

ここでは、従来の「生産の困難」は「労働」の多少にかわり、「交換価値」を左右するとされる。それゆえ、穀物の価格、労賃の騰貴は、この交換価値に直接関連せず、一般的利潤を下落させる。ここにはじめて、「生産物価格」の騰貴をとまわらない賃銀の騰貴が明確となり、賃銀と利潤との「對角線的對立」が解かれるのである。

とすると、それは、資本蓄積にともなう、地代・賃銀・利潤の對立を明らかにする。こうして、蓄積が人口増加を促し、それによる穀物需要の増加がより劣悪な土地を耕作にひき入れ、あるいはより劣悪な資本の土地投資をもたらし、かくして穀價は騰貴して地代が増加するに對して、賃銀の騰貴により利潤は低下せしめられる。それゆえ「地主の利害は、つねに社會のあらゆる他の階級の利害と對立している、ということになる、」のである。<sup>(14)</sup>

(14) Works. IV, p. 21. 吉田譯、三一ページ、大川譯、二

三ページ。

ここにマルサスの重農主義的な地代の把握に對立するリカードゥ独自の地代論把握を基礎に、資本蓄積にともなう三階級の分配關係が示さるのである。これは、後の『原理』初版における分配論と異ならない。

三

『一論』以後、リカードゥはミルのすすめにより、さらにそれを一そう詳細に書くことを計畫し、この仕事は一八一五年なかばから、一八一六年を通じて進められる。この間に生産・分配論上の右の定式に、價值論が導入されるにいたる。すなわち、「貨物の交換価値」と賃銀との關連をさらに明確にすることである。

一八一六年一月三〇日のミルへの手紙において、はじめて價值・價格の問題に言及しはじめる。<sup>(1)</sup> すなわち、諸商品の價格に影響を與える二方法は、貨幣の相對的價值の變化と、穀物の價值の變化であるが、貨幣の變化はすべての商品に同時的に影響するが、穀物の變化は、ただそれが原料として用いられる商品にのみ影響する。それゆえ、穀物の價值の變化が他のすべてのものの價值を

變化させる——前述の原料の場合を別として——というのは、「金・銀の價値の變化の原因」を誤解しているのだ、と批判する。

(1) Works. VI. pp. 348-9.

リカードゥは一般的物價の變動は貨幣價値の變化を通してより以外にはない、と把えているのであるから、穀物價値の變化が、貨幣と商品の價値にどのような影響を與えるかを第一に問題とせねばならない。ところでリカードゥにとって金銀は他の商品と同じ商品であり、穀物價値の變化は、金銀鑛山にも他の産業にも同等に影響するのであるから、物價の變化はそれによって生じない、と結論される。そこで次に、一定商品の價値の變動をとらえるには、「貴金屬の價値の不變性」が頼みの綱 (direct anchor) となるのである。金銀を「不變の價値尺度」として、商品の絶対價値の變動を物價變動として直接にとらえることができる、ということになる。

かくて、商品の絶対價値、それはその生産に要する勞働量によって規定されるが、この絶対價値の變動が、「不變の價値尺度」たる金銀によって、價格の變動としてあらわされ、そうして他方の賃銀と利潤との對抗の關連が

明白にされる。

こうしてリカードゥは、勞働と價値の規定を、金銀の不變の價値尺度を媒介にして、はじめて、物價と賃銀、および分配論に結合しえた。ここまでに到って、ついに價値は投下勞働によって規定される、というスミス價値論中の支配勞働説を積極的に批判し、『原理』第一章價値論の基本的礎石がおかれたのである。

この問題とともに同時に、「賃銀の騰貴が、主として機械および固定資本の援助によって獲得されうる諸商品の價格の上に生ずるところの不思議な影響 (curious effect)」を認識する<sup>(2)</sup>。この解決のために『原理』の草稿は遅延し、一八一六年一〇月一四日に、『原理』の草稿は遅七章の基礎となった「經濟學の原理」の部分が送られた。

(2) Works. VII. pp. 83-4.

次で課税に關する部分は一一月一七日までにミルの手もとに送られ、その後スミス、セー、ブキャナン、マルサス等の著作の批判の部が、一八一七年三月はじめに送られる。かくて『原理』初版は同年四月一九日出版にいたった。

こうしてリカードゥの主著は完成するのである。それは投下労働価値論にもとづく三階級間の分配諸關係の動態を一貫した理論體系として示す。その構成は一見風變りで不均合いのように見えるが、それは著述進行の順序を大體に追っており、リカードゥの經濟理論の核心は、その第一部たる最初の六章に示されている。

(3) 『原理』構成に關する諸問題、ミルの貢獻については、Works. I. Editor's Introduction. pp. xix—xxx.

ところでリカードゥがその研究の経過の中ではたしてきた任務は、結局、スミスの價值論における二面性を批判し、その支配労働説を捨てて投下労働説をとり、労働時間による價值規定をもって、その體系を基礎づけることにあつたことが分る。

スミスがすでに明らかにした資本主義社會の諸現象が、この投下労働説を基礎にしていかにして説明されるのか。リカードゥは、それを『原理』の最初の二章において、根本的にはたそうとして<sup>(4)</sup>いる。

(4) リカードゥ『原理』の構造と方法については、Karl Marx: Theorien über den Mehrwert. Bd. II. Tl. I. SS. 1—9. 長州一二譯、國民文庫版、參照。

ところが、すでに、投下労働量による價值の規定を發見しようとする際、それを、不變の價值尺度を媒介にして解決しているように、價值の本質が生産の社會的關係の表現に外ならないことは全く考察の中に入つてはこない。それは價值が何故に労働によって規定されるかの本質を不問にし、さらにまた労働そのものの分析を不問のままにしている。かくて價值はいかにして價格として表現されるのか、の價值の形態の分析がないのである。實體としての労働の量的規定が、かれの研究の経過における主要な對象であつたし、それが不變の價值尺度を前提することによって現象たる價格に直接關連させられてしまふのである。

ところで、このような投下労働による價值の規定によつて、リカードゥが、はじめて、三階級間の所得の對抗を明白に説明しえたのであるが、リカードゥの分析は、利潤・勞賃の把握においてそれをスミスから直接に受けとつたままであつた。すなわちスミスの自然價格は生産物の價格として受けとられ、それが直接價值と等置されるのである。そこには平均利潤率の存在は、現象としてはじめから前提され、かくて投下労働量による價值規定

とは本来必然的に矛盾する関連にあるものが、直接合致したものと把握されるのであるから、その矛盾は極度に鋭くあらわれる。すなわち、資本の有機的構成と流通速度が異なる場合、価値通りに価格を規定すれば、利潤率は各資本について異なることになる。この問題をリカードゥは「奇妙な影響」として把握し、『原理』価値論において投下労働価値説の修正として説明し、その修正は例外的であって、大體において投下労働説は維持される、と云わねばならなかったのである。<sup>(5)</sup>

(5) Works. I, pp. 36, 45. Works. VIII, p. 193.

『原理』はその後二つの版をかさね、その間不變の価値尺度をめぐって、論争が進められるとともに、この投下労働価値説に對する例外規定は、マルサスをはじめとする批判者たちの主要な批判対象であった。

この論争の過程で、リカードゥはますます修正に重きをおき、投下労働説から後退して行った、というのが、ホランダーの最も重要な主張である。ところが、これに對して、その根拠は薄弱であり、リカードゥの修正論は、『原理』初版において存在し、第二・三版においては、それがいっそう明白化されて行ったにすぎない、との批

判が、スラッファ教授によって示されている。<sup>(6)</sup>

(6) Works. I, Editor's Introduction, pp. xxxvii ff.

とくに、新『全集』第四巻においてはじめて公表された遺稿「絶対価値と交換価値」は、その死の数週前に書かれ、それはさきの矛盾を徹底的にとこうとする努力ではあったが、結論は否定的であった。<sup>(7)</sup>

(7) Works. IV, p. 404. Works. IX, p. 387.

ミック教授は『原理』初版以後の「不變の価値尺度論」争の中に、価値の實體たる労働を分析しようとするリカードゥの新しい傾向があり、それが最終の遺稿での「絶対価値」にまで到らしめるものと把握しとくに強調してリカードゥ価値論の發展とされてゐる。R. L. Meek; Studies, pp. 110—116. はたして、ここにリカードゥの価値實體分析が進展してゐるであろうか。むしろ、その缺如のゆえの良心的苦惱と見る方が、リカードゥの方法からの必然的結果として正しいであろう。この點でギルマン氏の把握は正確である。J. M. Gillmann; Ricardo's development as an economist. in "Science and Society. Vol. 20. No. 3. Summer 1956." pp. 213—221.

「不變の価値尺度」についてのリカードゥの見解の變化については、Works. I, Editor's Introduction, pp. xl ff. を参照。

リカードゥの困難は本来価値の實體たる労働の分析、

その形態たる價格の分析、そして價值と生産價格の關連の分析を通じてはじめて、その矛盾の解明がなされるのである。それなくして、價值と生産價格を同一視し、平均利潤率の形成を與えられたものとして前提する限り、必然的に解けない矛盾として残らざるをえない。リカードゥは、その本來の課題たる勞賃對利潤の對立を説明する key-point であった投下勞働價值説を、最後まで放棄せず、しかも、その非歴史的方法からして必然的に生ずる矛盾に最後まで苦惱を續けた。ここにかれの良心的な研究の態度の一面が示される。<sup>(8)</sup>

(8) 『原理』第三版においてはじめて付加された第三章「機械論」とこれをめぐる論争においても、リカードゥは自己の見解を守る點において、同様の態度をとっている。

Works. I. Editor's Introduction. pp. Iviii ff. 眞實一男『機械と失業』一九五九年刊、參照。

平均利潤率形成の過程をその投下勞働價值説によって説明することの解決不能こそ、古典派經濟學が理論的課題として残した最も大きな問題であり、マルクスによつてはじめて解決されるのである。リカードゥの死後、その直接の後繼者たちは、その投下勞働價值説を放棄し、生産費説に依據することによって、右の問題は全く回避

される。だが、この生産費説こそリカードゥの批判しようとしたものではなかつたらうか。すなわち、リカードゥが、その生涯の終りにいたるまではなさなかつた目標たる勞賃對利潤の對立、あるいは地代對利潤の對立、總じて資本主義社會における三階級の對立する生産關係を、その分析の外に放棄してしまつたからである。

(9) F. Engels: Verwort zur das: Kapital "Kapital. Bd. II" Berlin, Dietz Verlag. Ss. 18—19.

ホランダーの研究は以上に指摘したように、その價值論把握において缺陷をあらわしている。ところが、ホランダーの批判した限界效用學派からのリカードゥ批判も決してなくなつたわけではないし、またマーシャル流の折衷的リカードゥ價值論も依然として主張される。ある論者によれば、總じてスミス、リカードゥの古典學派價值論はもちろん、マルクスの價值論さえ(!) 投下勞働價值論ではない、という點について現在「おどろく程の見解の一致」がみられるとのことである。<sup>(10)</sup> そのような主張の問題はリカードゥの經濟學の中心點たる資本主義社會における階級對立の關係をいかにリカードゥ自身の體系からぬぐい去るかにある、ということができらるであ

ろう。それは古典派經濟學體系の完成者たるリカードの偉大な歴史的意義を、かれからうばい去ることを意味する。

(9) American Economic Review. Vol. XLIX, No. 2. May 1959. Papers and proceedings on the 71st Annual Meeting of the American Economic Association. p. 495.

われわれのリカードに學ぶ點は、右の内的構造把握であり、それに關連する各論點を、リカードがその論争の過程でいかに把握し、理論形成をつづけたかである。そしてさらにリカードの科學的偉大さと同時に、

その科學的缺陷をも學ぶことが必要である<sup>(11)</sup>。

(11) K. Marx, *Theorien*, SS. 4—5.

最近におけるリカード研究は、従來の價值論、貨幣論、分配論、國際經濟論から、資本蓄積論、機械論、恐慌論さらにかれの實踐的活動・思想の研究へと、ますます展開し深化されつつある。資本主義社會の存続するかぎり、リカードとの對決は經濟學の重要な課題であり、貴重な思想理論の泉となりつづけるにちがいない。

(一九六〇・二・一八) (一橋大學助教)